



Title	日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究： 談話構造とスキーマを中心として
Author(s)	李, 吉鎔
Citation	阪大日本語研究. 2001, 13, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6691
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究 －談話構造とスキーマを中心として－

A Contrastive Analysis of Refutation Behavior
between Japanese and Korean

李 吉鎔
LEE Kil-Yong

キーワード：談話支持ストラテジー表現、意見表明文、談話構造、線状性、スキーマ

【要旨】

従来の談話分析研究では発話の機能分析に焦点が当てられてきたのに対し、本研究では反対意見の表明という言語行動において、話し手が「どのように談話を組み立てるか」に注目して談話の構造分析を行った。その結果、日本語の談話においては「談話支持ストラテジー表現 → 理由節 → 提案節」という線状性を持った同一パターンの談話構造が認められ、日本語社会の構成員には意識の中に「何をどのように言うか」というルールが一般的な知識として備わっていることがわかった。一方、韓国語の談話の場合は、比較的自由に談話を構成していくものが多く、「談話支持ストラテジー表現」が特に自由な振るまいを見せていていることが確認された。このように日韓の言語行動の構造に違いが認められるのである。

1. はじめに

社会言語学では、近年、語用論 pragmatics、「依頼」「勧誘」「断り」「謝罪」などの発話行為論 speech act theory、談話分析 discourse analysis などの領域との学際的研究が進められ、日本語と諸外国語との対照研究も盛んに行われている。複数の言語社会における言語行動の対照研究は、異文化コミュニケーションにおける摩擦や誤解に関する研究、及び摩擦や誤解の解消に関する研究につながり、社会的にも貢献度の高い分野だと言えよう（西原 1994）。

従来このような談話分析研究では依頼、勧誘、断りなど種々の発話行為における発話の機能分析に焦点が当てられてきたが、本稿では「どのように談話を組み立てるか」といった談話の構造分析に焦点を当てる。近年の日本語教育学の分野においても、どのように話しかけて注意を喚起し、表現したいことを切り出し、話を運んでいったらいいのかという

談話レベルの文法研究に関心が向けられ始めており、話し始めや展開の仕方・終わり方など、より広範囲のまとまりで発話を捉えて、その構造に焦点を当てた研究が盛んになってきている（柏崎 1993 など）。

本稿は、このような機運の中で、反対意見表明という具体的な言語行動を取り上げ、談話の構造について記述的な分析を行い、言語行動におけるスキーマの存在を明らかにすることを目的とするものである。反対意見の表明は、聞き手にすでにある意見が存在していることを前提とし、反対意見を表明することによって、聞き手の意見や行動を規制するものである。言うまでもなく、Brown & Levinson (1987) の言う強いFTAの発話行為であり、対人関係の維持、及び破綻に大きく関わると予測されるものである。したがって、対人関係上の慎重な言語行動が要求されるものであり、「何をどのように言うか」という点に話し手の注意が向けられ、談話のパターンが抽出しやすいと考えられるのである。

反対意見表明、あるいは意見表明については、マイナード (1993) に今後に注目すべき研究項目としてあげられているが、管見の限りにおいて先行研究はまだ少なく、本格的な研究が期待される。以下関連する先行研究を見ていくことにする。まず、意見文に関するものに山下 (2000) がある。山下は新聞投稿における意見記述の前置き表現の特徴についてまとめ、読み手が書き手の意見を受け容れる素地を築くことや意見表示を円滑に行う言語ストラテジーとして、前置き表現が効果的な働きを担っていると述べている。談話の構造に関しては新聞投書における文章構造について分析を行った木戸 (1992) があり、新聞投書では主張が文章の終わりにくる文章構造の型が多いことを指摘している。また、Maynard (1998) は新聞コラムにおける日本語の談話の特徴について、コメント文がパラグラフや文章の終結部に位置する頻度が高いと指摘している。さらに、相本 (1997) は日本語学習者の作文の問題点として、日本語での談話の展開方法に関わる問題を取り上げている。相本は日本語での談話の展開のさせ方も学習項目の一つとして取り上げるべきだと指摘し、日本語での意見文の代表的な構造を示している。

本稿の特徴をこれらの研究と比較しつつまとめれば次のようになる。まず、書きことばと違って発話の計画度が低い話しことばを対象に、日本語における談話の構造を明らかにしているということである。また、韓国語と対照することによって、日本語と韓国語における談話構造の異同を明らかにしていることである。

2. データおよび分析の単位

2. 1. 調査およびデータの概要

データは日本と韓国で1999年度に50人ずつの大学生を対象に実験形式のインタビュー調査を行って得られたものである。反対意見表明行動に関する刺激文の作成に際しては、日本ではゼミ旅行に関する話題、韓国ではMT¹⁾に関する話題を設け、反対意見の表明の対象として、「費用の問題」「場所の問題」「評判の問題」の3つをあらかじめ提示している。話題以外の他の要素は日韓の間で統一してある。刺激文については資料を参照されたい。

インタビュー調査は、意識に関わる部分と行動に関わる部分の二部からなるものである。意識に関する部分では、各話し相手に対して反対意見の表明を行うか否かを調べ、行動に関する部分では、インフォーマントに具体的な場面を想起してもらった上で、各話し相手別に反対意見を具体的に言ってもらった。話し相手の設定は、上一下関係（先輩、同級生、後輩）に親一疎関係をクロスさせた実在する人物の6人を想定してもらっている。なお、インフォーマントは、関西・ソウルに在住している大学生を対象にしているが、なるべく関西圏出身者及び韓国首都圏出身者を中心としてある²⁾。

調査時には、インフォーマントにピンマイクをつけてもらい、テープレコーダーは隠している。また、confrontationの問題が起こらないように、調査者はインフォーマントと90度の位置に座っている。そして、調査者はインフォーマントのスムーズな発話を誘導するため、無言（首の縦振り）のあいづちを打っていることを報告しておく。

2. 2. 分析の単位

談話を扱う言語行動研究においては、これまでにいくつかの分析単位が提案されてきた。発話の機能的な研究で利用される単位に、発話の行為的機能と密接に結びつけた「move」という単位がある（中田1990、1991、熊谷1997）。また、発話をその意味内容によって分類した「意味公式 semantic formulas」（Beebe et al 1990、生駒・志村1993）もある。

本稿では、これらの単位を参考し、話し手によって発話された内容が何について述べられているかという内容的にまとまった発話を分析の単位とする。具体的には、本稿で扱うデータは一人の話し手が話し続ける独話の性格を持っているため、各単位内に動詞などの述語を含むことと意味的に何らかのまとまりがあることを必須条件とした。したがって、談話の構造に影響を及ぼさず任意性の強いもの、すなわち呼びかけ語やfiller、hedge表現などは対象外とした。

また、井出（1982、1991）は敬語ストラテジーの言語表現のレベル分類を行い、文レベルの要素と談話レベルの要素があるとしている。ナカミズ（1992）は、依頼発話行為を構成するストラテジーを「依頼を支持するストラテジー」・「理由節」・「依頼節」の三部分に分け、個別に分析している。本稿では井出（1982、1991）とナカミズ（1992）に従い、反対意見表明行動を文レベルの問題である反対意見を述べる部分、すなわち意見表明文と談話レベルの問題である談話支持ストラテジー表現の2つに分ける。そして、談話レベルの問題である談話支持ストラテジー表現を中心に談話の構造分析を行いたいと思う。

下に談話例を示すが、コンマで区切った発話を一つの単位と認めて考察を進める。談話例では、点線部は談話支持ストラテジー表現³⁾、実線部は意見表明文の理由節、二重下線部は意見表明文の提案節を示す。

《反対意見表明の談話例》【JF-私-115-親・下】⁴⁾

今度のゼミ旅行なんだけどね、あそこは私たちも毎年あそこに行ってるけど、あそこは ウン 行ったらわかると思うんだけど、費用のわりにそんなによくないと思うの、もしかしたら他にも費用がもっと安くていいところが探したらあるかも知れないから、もし時間があったらそういうところ探して別の場所にしてほしいんだけど、お願いで
きるかな。

3. 反対意見表明行動の構造分析

以下、次の順序で、反対意見表明行動の構造に関する分析結果をまとめることにする。

- (a) 談話支持ストラテジー表現（§ 3. 1.）
- (b) 意見表明文について（§ 3. 2.）
- (c) 反対意見表明行動の構造（§ 3. 3.）
- (d) 反対意見表明行動におけるスキーマ（§ 3. 4.）

3. 1. 談話支持ストラテジー表現

まず、談話支持ストラテジー表現の種類について、次の11種類の談話支持ストラテジー表現が認められる。各談話支持ストラテジー表現の代表例をあげる。

A へりくだり表現：

「エー 私が言うのも マ そういう筋合いでもないかもしないけど」

【JF-私-105-疎・下】

B 見せかけの賛成：

「そこもいいとは思いますが」【JF-私-109-親・上】

C 聞き手尊重表現：

「こう マ それなりに決めたことだと思うけど」【JM-私-137-疎・下】

D 問いかけ表現：

「エ 今年ってもうこれはこうやって行くって言うのも、ほとんど決定なん?」

【JM-私-122-疎・下】

E 問いつめ表現：

「今までこういうところ行ってて全然いやじゃなかったですか?」

【JF-私-104-親・上】

F 禁止表現：

「거기 관둬 (そこはやめろ)」【KM-私-144-親・下】

G 意見表明：

「ト これは個人的意見なんですが」【JF-私-115-疎・上】

H 反対表明：

「ウン 実は僕は反対意見を持っています」【JM-私-111-親・上】

I 話題言及表現：

「アノー ト 今回のゼミ旅行の行き先なんですけれども」【JF-私-105-疎・上】

J 場面言及表現：

「マ せっかく マ 今こういう話し合いをしているし」【JM-公-121-疎・上】

K 内容言及表現：

「マ だいたい多数意見が通って マ 先生の力が絶対やから マ それに従わなあかんのわかるけど」【JM-私-146-疎・同】

11種類の談話支持ストラテジー表現のうち、A～C群は、主にFTA（相手のフェイスを脅かす行為）の緩和を目的のために使用されたストラテジーである。「FTAの緩和ストラテジー」とは、フェイスに対する脅威を軽減し、さらに補償するために採用されるストラテジーを指す。話し手がへりくだったり、聞き手の意見を尊重したり、これから反対する意見について一時的に賛成をしたりするストラテジーが見られる。

D～F群は、反対意見表明行動においてより効果的に聞き手を説得するために使用されたストラテジーと分類できる。聞き手に反対することがらについて訪ねたり、責任者である聞き手を問いつめたり、聞き手の行動を禁止し、脅かしたりする表現などがある。

G～K群は、聞き手の理解の補助をねらい、表現・伝達の課程とその内容の調整に配慮したストラテジーである。これには、話し手自身が（反対）意見を持っていることを言明したり、話題や話題の内容、及び場面などについての配慮表現などが入る。

事実、A～CのFTAの緩和ストラテジー、D～Fのより効果的な説得のためのストラテジー、G～Kの聞き手の理解の補助をねらったストラテジーは、話し手と聞き手の間の上下・親疎関係などによって使い分けられるのである。このような談話支持ストラテジー表現の使い分けに関しては、従来から言語行動を扱った多くの研究で取り上げていることであるが、本稿では談話の

構造分析を目的としているため、次の表のようにまとめるにとどめる。

表1 談話支持ストラテジー表現の機能

談話支持ストラテジー表現	機能
A～C	FTAの緩和
D～F	より効果的な説得のため
G～K	聞き手の理解の補助をねらう

3. 2. 意見表明文

ここでは、意見表明文の構造について考察していきたい。意見表明文には、反対する理由が述べられ、反対することがらに対する話し手の評価が行われる理由節と、反対することがらに取って代わる新しい提案が行われる提案節とに分けられる。理由節は、反対することがらに対して新しい提案を行うための理由付け・根拠づくりが見られ、提案節の直前に位置するものが多い。

3. 2. 1 理由節

理由節は大きく「反対する理由」と「反対することがらに対する話し手の評価」に分けられる。調査時の刺激文において、反対意見の表明の理由として、「費用の問題」「場所の問題」「評判の問題」の3つをあらかじめ提示しているため、主にこれらの3つが理由節の大半を占めている。

《反対理由》

(1) はゼミ旅行に行く場所についてのものである。(2) はゼミ旅行に行くのに費用がかかるという内容についてのものである。一方、あらかじめ与えられた反対の理由以外にも、次のようなものが反対意見表明の理由として現れている。(3) のように話し手自身の好みをあげたり、(4) のように場所の設備が充実していないことを理由にあげたりするものである。

(1) 「エートいつもなんか同じ場所に行ってるんで」【JF-私-101-親・上】

(2) 「あそこがちょっと一予算的にかかりすぎるんちがうかなと思うんだけど」

【JF-私-105-親・同】

(3)「僕は エー ト－ 沖縄より北海道が好きやけど」【JM－私－134－親・下】

(4)「ウン あまり施設が整っていいとは言えないと思うんですが」

【JF－私－115－疎・上】

《評価》

次に、反対することがらに対する話し手の評価の例を挙げる。(5)のように話し手自身の感情を述べたり、(6)のように関わりのある第三者やみんなの評価を話し手が代弁する形で述べたりする。

(5)「すごくいやなんだけど」【JF－私－104－疎・同】

(6)「あまり場所的によくないというのがみんなの意見なんですが」

【JF－私－115－親・上】

3. 2. 2 提案節

提案節においては、反対することがらに取って代わる新しい提案が行われているが、提案の仕方は種々様々である。たとえば、提案節に用いられた表現類型のモダリティ形式に注目してみると、仁田（1991）の言う「述べたて」・「働きかけ」・「表出」・「問い合わせ」のすべての文に分類できるほど、そのバラエティに富んでいる。いくつか例文をあげると次のようになる。

(7)「もっと他にいいところいっぱいあると思うんですよ」【JF－私－101－親・上】

〈述べたての文〉

(8)「僕の意見も聞いてみてください」【JM－私－111－親・上】〈働きかけの文〉

(9)「たまにはちゃうところにしてみましょうよ」【JM－私－138－親・上】〈働きかけの文〉

(10)「エー もうちょっと アノ 場所を検討していただきたいんですけどー」

【JF－私－107－疎・上】〈働きかけの文〉

(11)「ウン エー 僕はほかの場所にも行ってみたいです」【JM－私－123－疎・上】

〈表出の文〉

(12)「北海道のほうがいいな」【JM－私－134－親・同】〈表出の文〉

(13)「何か別の場所に変えてみようとか思わへん？」【JF－私－133－疎・下】〈問い合わせの文〉

また、表現類型のモダリティ形式の分類以外にも、提案の仕方には次のような特徴が見られる。まず、語調を弱める終助詞「～ね（↑）」「～かな（↑）」などを付け加え、提案の印象を和らげるものがある。また、ストレートに言わずに「～ていただけますか」のよ

うに間接的な形式で言ったり、「なんとかしていただけないとありがたいんですけど」と主張を明示的にしないで暗に示す表現を用いたりする。「～けど」のように、文を言い切らない形を用い、聞き手に押しつけないようにする。このように、意見表明文については考慮すべき言語事象が数多く残されており、今後別稿を用意したい。

3. 3. 反対意見表明行動の構造

以上で談話支持ストラテジー表現と意見表明文について分類をしてきた。談話支持ストラテジー表現は、対人関係に配慮したFTAの緩和ストラテジー、より効果的な説得のためのストラテジー、聞き手の理解の補助をねらったストラテジーなどの機能を果たし、談話レベルの要素である。文レベルの要素である意見表明文は理由節と提案節に分けられ、理由節は反対することがらに対して新しい提案を行うための理由付け。根拠づくりが行われるため、提案節においては具体的な提案が行われている。

3. 3. 1 日本語の場合

今まで見てきた、談話支持ストラテジー表現、理由節、提案節に構成される反対意見の表明という言語行動は目的指向的であるため、その展開はほぼ一定であることが予想される。次の表2は、談話支持ストラテジー表現と理由節・提案節が線状的に決まったパターンを持って現れることを示している。なお、意識調査の結果、「反対意見を表明する」と回答した聞き手に対する談話である。

表2 反対意見表明行動の線状性（反対意見を表明する場合）

Japanese	親上		疎上		親同		疎同		親下		疎下	
	実数	%										
談話数	49		19		50		33		44		29	
線状的なもの	47	95.9%	16	84.2%	43	86.0%	30	90.9%	38	86.4%	25	86.2%
逸脱したもの	2	4.1%	3	15.8%	7	14.0%	3	9.1%	6	13.6%	4	13.8%

表2から反対意見の表明という言語行動において、上下・親疎といった話し手と聞き手との関係に関わらず84.2%～95.9%の割合で同一パターンの談話構造が現れていることがわかる。つまり、表2は、談話支持ストラテジー表現の選択・提案節における提案の仕方などは、上下・親疎といった話し手と聞き手との関係に影響を受けるが、談話を組み立てる順序は日本語社会にかなりの割合で決まっていることを示唆している。

この結果は、木戸（1992）が指摘しているように、新聞投書では主張が文章の終わりにくる文章構造の型が多いことと、新聞コラムにおいてコメント文がパラグラフや文章の結末部に位置する頻度の高さを指摘しているMaynard（1998）の結果を追認するものである。

3. 2. 2 韓国語の場合

ここでは、韓国語の談話の構造について日本語と対照しつつまとめる。

表3 反対意見表明行動の線状性（反対意見を表明する場合）

Korean	親上		疎上		親同		疎同		親下		疎下	
	実数	%										
談話数	50		36		50		43		50		38	
線状的なもの	32	64.0%	22	61.1%	30	60.0%	25	58.1%	33	66.0%	26	68.4%
逸脱したもの	18	36.0%	14	38.9%	20	40.0%	18	41.9%	17	34.0%	12	31.6%

表3は韓国語の反対意見の表明という談話の線状性を調べたものである。「談話支持ストラテジー表現→理由節→提案節」といった線状性を保っている割合は、58.1%～68.4%（平均62.9%）にすぎず、平均37.1%が線状性から逸脱したものである。日本語の表2と比べると、「談話支持ストラテジー表現→理由節→提案節」といった談話の組み立て順序の線状性から逸脱したものが多いことがわかる。談話構造の線状性に関して χ^2 検定を行った結果、韓国・日本間で0.1%（ $\chi^2=43.346$ ）水準で有意差が認められた。つまり、日本語と韓国語との間で、反対意見表明行動の構造が異なることが指摘でき、韓国語に関しては談話の組み立て順序の線状性が認められないと言えそうである。本稿で言う「談話支持ストラテジー表現」を、多くの研究で「前置き表現」と称しているが、本稿で「談話支持ストラテジー表現」という用語を用いた理由がここにある。韓国における先行研究では、「前置き表現」という用語は見られず、「支持行為 supportive move」という用語が使われている（Kim 1996）。

3. 3. 3 線状性からの逸脱

本節ではこれまで見てきた談話の線状性から逸脱したものの形態について考察したいと思う。

表4 線状性から逸脱したものの内訳

(言明する場合)	親上		疎上		親同		疎同		親下		疎下	
	実数	%										
Japanese												
逸脱したもの	2	4.1%	3	15.8%	7	14.0%	3	9.1%	6	13.6%	4	13.8%
(理由→支持ス)	2	100%	3	100%	3	42.9%	2	66.7%	5	83.3%	4	100%
(提案→理由)					3	42.9%	1	33.3%	1	16.7%		
(提案→支持ス)					1	14.3%						
Korean												
逸脱したもの	18	36.0%	14	38.9%	20	40.0%	18	41.9%	17	34.0%	12	31.6%
(理由→支持ス)	3	16.7%	6	42.9%	7	35.0%	10	55.6%	8	47.1%	5	41.7%
(提案→理由)	13	72.2%	7	50.0%	6	30.0%	8	44.4%	4	23.5%	4	33.3%
(提案→支持ス)	2	11.1%	1	7.1%	7	35.0%			5	29.4%	3	25.0%

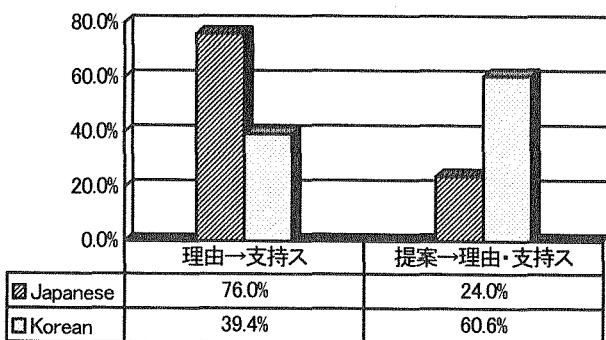
（支持スは、談話支持ストラテジー表現を指す）

表4は線状性から逸脱したものの内訳である。日本語では数こそ少ないが、平均的に「理由節→談話支持ストラテジー表現」に逆戻りするのが19談話(76%)、提案節まで行ってから理由節あるいは談話支持ストラテジー表現に逆戻りするのは6談話(24%)にすぎない。つまり、日本語では提案が談話の終わりに来る談話型が多いことが認められる。

一方、韓国語の談話では「理由節→談話支持ストラテジー表現」(39談話:39.4%)を「提案節→理由節・談話支持ストラテジー表現」(60談話:60.6%)が大きく上回るのである。つまり、韓国語では提案を行った後でも理由を述べたり、談話支持ストラテジー表現を用いるなど、比較的自由に談話を構成していくことができると解釈できる。次の図1は日本語と韓国語の差異を簡略に示したものである。

以下に韓国語の談話例を挙げる。点線部は談話支持ストラテジー表現、実線部は意見表明文の理由節、二重下線部は意見表明文の提案節を示す。日本語訳は筆者によるもので、原文の発話の意味をなるべく忠実に残している。

《韓国語の談話例》【KF-私-106-親・同】



(支持スは、談話支持ストラテジー表現を指す)

図1 線状性からの逸脱の内訳

①선희야. ②우리 엎티 땐데 가자. ③거기 왜 가? ④별로 재미없고. ⑤애들도 막 가기 싫어하는데.
⑥喬 우낀거 같애. ⑦글루 가지말자.

《日本語訳》

①ソンヒ (呼びかけ)、②私たち MT違うところに行こう。③なぜそこに行くの?
④あまり面白くなくて、⑤みんなもいやがっているし、⑥ちょっとおかしい。⑦そこに行くのはやめよう。

上の談話例では、談話の冒頭に提案(発話②)が行われ、その後ろに談話支持ストラテジー表現(発話③)と理由節(発話④~⑤)が現れている。そして、談話の最後にはもう一度提案(発話⑥)が行われている。談話支持ストラテジー表現(発話⑦)は、問い合わせ表現と分類され、より効果的に聞き手を説得するために使用されたストラテジー表現である。談話の始めに何の前触れもなく、いきなり提案されること自体、日本語の談話では殆どみられないものである。柏崎(1993)が指摘しているように、日本語の談話は相

手への負担を絶えず配慮する心的態度が機能しながら展開していくものと考えられるが、上の韓国語の談話の構造は聞き手に選択の余地を与えないストレートな感じがするものであろう。一方、視点を変えれば、先ず言いたいことをはっきり言明して、そこから聞き手と交渉を行っていくという、前向きな姿勢が評価できるのではないだろうか。上の談話例は一つの例にすぎないが、韓国語の談話は定型化されたものではなく、比較的自由に構成されるものである。このように線状性をもって厳格に談話を構成していく日本語の言語行動と比較的自由に談話を構成していく韓国語の言語行動には違いが認められるのである。

3. 4. 反対意見表明行動におけるスキーマ

本節では、反対意見表明行動におけるスキーマについて考察したいと思う。文化を共有する集団には一般的あるいは典型的な知識の集合であるスキーマ（schema）が共有されていると考えられている（橋内 1999、三牧 1999）。ここで反対意見の表明という言語行動を組み立てる際にもこういったスキーマが共有されていると仮定する。すなわち、反対意見を表明する際に、どのような順序で言うか、あるいはどのような表現を選択するかに関する一般的な知識が共有されていると考えるのである。

反対意見表明行動にスキーマが存在するのであれば、反対意見を表明する前に、すでに意識の中で「何をどのように言うか」というのが一般的な知識として備わっているはずである。そこで、意識調査において、「反対意見を表明しない」と回答した聞き手に対する談話を分析することにする。表 5 は「反対意見を表明しない」と回答した聞き手に対する談話である。なお、「親一上」及び「親一下」については絶対的な談話数が少ないので扱わない。

表 5 から、反対意見の表明という言語行動における談話の線状性が、83.9%～95.2%の割合で維持されていることがわかる。つまり、意識の上での反対意見の表明という言語行動においても、「談話支持ストラテジー表現 → 理由節 → 提案節」といった談話の組み立て順序はすでに形成されているものと解釈できる。本研究は大学生を対象に反対意見表明行動を分析したものであるが、このような言語行動におけるスキーマは日本語社会全般に関わるものであり、反対意見の表明行動に関わらず依頼・勧誘・断りなどの言語行動に広く見られるものと推測できる。ただし、その実証は今後の課題である。

表 5 反対意見表明行動の線状性
(反対意見を表明しない場合)

Japanese	疎上		疎同		疎下	
	実数	%	実数	%	実数	%
談話数	19		33		29	
線状的なもの	16	84.2%	30	90.9%	25	86.2%
逸脱したもの	3	15.8%	3	9.1%	4	13.8%

4. まとめ

以上で反対意見の表明という言語行動の構造とスキーマについて分析を行ってきた。その結果は次の4点にまとめられる。

- (1) 反対意見表明行動は談話レベルの問題である談話支持ストラテジー表現と文レベルの問題である反対意見を述べる部分（意見表明文）との2つに分けられる。談話支持ストラテジー表現は、FTAの緩和ストラテジー、より効果的な説得のためのストラテジー、聞き手の理解の補助をねらったストラテジー、の機能を果たしている。
- (2) 日本語における談話を分析した結果、上下・親疎といった話し手と聞き手との関係に関わらず84.2%～95.9%の割合で「談話支持ストラテジー表現→理由節→提案節」という同一パターンの談話構造を有することがわかった。つまり、談話支持ストラテジー表現の選択・提案節における文の選択などは、上下・親疎といった話し手と聞き手との関係に影響されるが、談話を組み立てる順序は日本語社会でかなりの割合で決まっていることが確認されたのである。
- (3) 韓国語における反対意見の表明という談話の線状性を調べた結果、「談話支持ストラテジー表現→理由節→提案節」という線状性を保っている割合は、58.1%～68.4%にすぎず、平均37.1%が線状性から逸脱したものであった。また、日本では一般に「前置き表現」と称される「談話支持ストラテジー表現」が韓国語の談話の中では、自由に用いられることがわかった。このことで、線状性をもって厳格に談話を構成していく日本語の言語行動と比較的自由に談話を構成していく韓国語の言語行動に違いが認められるのである。
- (4) 日本語の談話では、意識調査時に「反対意見を表明しない」と回答した聞き手に対する談話を分析した結果、83.9%～95.2%の割合で談話の線状性が維持されていることがわかった。これは日本語社会の構成員には意識の中に「何をどのように言うか」というルールが一般的な知識として備わっており、反対意見表明行動に関するスキーマが存在することを示していると考えられる。

本稿では談話の構造分析を目的にしているため、各発話の機能的な考察は今後の課題となる。特に意見表明文の分析において、発話・伝達のモダリティ形式に注目して、主文末における発話・伝達的態度のあり方について分類を行ったが、提案の仕方は実に種々様々である。今後包括的な分析の枠組み設定を急ぎたいと思う。

【注】

- 1) MT とは、Membership Training のイニシャルをとったもので、韓国の大学における学科単位の年中行事である。通常 2 泊 3 日の日程で合宿を行う。学科の構成員の親睦を深めることを目的としており、強制性を帯びない自主的なものである。
- 2) 韓国では首都圏のソウル (23 人) 及び京畿道 (7)、慶尚道 (13)・全羅道 (3)・忠清道 (2)・江原道 (1)・済州道 (1) が含まれる。日本では、関西圏の大坂 (16)・和歌山 (4)・兵庫 (10)・京都 (1)・奈良 (1)・三重 (1) が含まれる。西日本では、四国の香川 (2)・高知 (1)、中国地方の島根 (2)・鳥取 (1)・山口 (2)・鹿児島 (1)、東日本の北海道 (1)・東京 (1)・長野 (1)・静岡 (2)・福井 (1)・愛知 (2) などが含まれている。
- 3) 「談話支持ストラテジー表現」がある一方で、その対極の「談話放棄ストラテジー表現」も見られる。反対意見表明回避・意見表明回避など、反対意見を表明しないあるいは意見表明そのものを行わないことにより、反対意見表明行動を放棄するものである。これらのストラテジーは、主に目上あるいは疎の関係の人に使われ、対人関係に配慮した結果であると考えられる。
- 4) 記号の読み方；JF：日本人女性、私：私的な場、115：談話番号、親・下：聞き手との関係

【参考文献】

- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79 日本語教育学会
- 井出祥子 (1982) 「待遇表現と男女差の比較」『日英語比較講座 文化と社会』第 5 卷 大修館書店
- (1991) 「待遇表現」『講座 日本語と日本語教育』第 12 卷 (下) 明治書院
- 柏崎秀子 (1993) 「働きかけ行動の談話分析－依頼・要求表現の実際を中心に－」『日本語教育』79 日本語教育学会
- 木戸光子 (1992) 「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』第 55 号 表現学会
- 熊谷智子 (1997) 「はたらきかけのやりとりとしての会話」茂呂雄二編『対話と知：談話の認知科学入門』新曜社
- 帽本総子 (1997) 「意見文の構造－中・上級学習者の作文における問題点－」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』創刊号 大阪大学留学生センター
- 泉子・K・マイナード (1993) 『会話分析』(柴谷方良・西光義弘・影山太郎編集 日英語対照研究シリーズ 2) くろしお出版
- 中田智子 (1990) 「発話の特徴記述について－単位としての move と分析の観点－」『日本語学』9-11
- (1991) 「発話分析の観点－多角的な特徴分析のために－」『国立国語研究所報告 103』研究報告 12
- ナカミズ・エレン (1992) 「日本語学習者における依頼表現－ストラテジーの使い分けを中心として－」『待兼山論叢』26 大阪大学文学会
- 西原鈴子 (1994) 『在日外国人と日本人との言語行動的接触における相互「誤解」のメカニズム－日本語と英・タイ・朝・仏語の総合的対照研究－』平成 5 年度科学研究費補助金研究成果報告集
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

- 橋内武 (1999) 『ディスコースー談話の織りなす世界ー』 くろしお出版
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析—」
『日本語教育』 103 日本語教育学会
- 山下みゆき (2000) 「新聞投書における意見記述の前置き表現の特徴」『平成 11 年度日本語教育研究
コース報告書』 日本語教育学会
- Beebe, L. M., Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R. (1990) Pragmatic transfer in ELS refusals. In
R.C. Scarcella, E. Anderson & S.C. Krashen (Eds.), *On the development of communicative
competence in a second language*. New York : Newbury House.
- Brown, P. and S. Levinson, (1987) *Politeness : Some universals in language usage*. Cambridge :
Cambridge University Press.
- Kim, Kyung-Suk. (1996) Strategies for the Speech Acts of Request, Refusal, and Apology. *The
Sociolinguistics Journal of Korea* 4-2.
- Maynard, S. (1998) 「Understanding and Teaching Japanese Discourse Principles —A Case of
Newspaper Columns—」『世界の日本語教育』 8 国際交流基金日本語国際センター

【資料】

〈日本語刺激文〉

○○大学では、ゼミ旅行の行き先を毎年決まったところに行っていますが、多少費用がかかり、あり当たりの場所がらから、評判がよくありません。あなたは、それを不思議に思い、友人との会話の中で、「何でいつもそこなんだろう。もっといいところはたくさんあるんじゃないかな?」と言ったこともあり、内心反対です。

代表を務める()さんは、例年にならって今年も同じところに行くことにしたいと言っています。反対意見を述べるときどのようにいいますか。

〈韓国語刺激文〉

○○대학에서는 MT를 매년 같은 장소로 갑니다. 그러나, 비용도 많이 들고, 전혀 새로운 것이 없는 곳이라, 별로 인기가 없습니다. 그런데도 매년 같은 곳을 가는 것이 이상해서, 친구에게 "더 좋은 데도 많은데 왜 거기만 가지?"라고 말한 적도 있을 정도로 내심 반대하는 입장입니다.

대표자인()는 이번에도 매년 가던 곳으로 가기로 하자고 합니다. 반대의견을 말할 때 어떻게 말씀하시겠습니까?

【()内には、親疎関係、上下関係（目上、同等、目下）をクロスさせた 6 人の話し相手が入る。】

い きりょん（博士後期課程学生）